

IV 高等部の研究

テーマ：生徒の「なりたい自分」を支援する取り組み

研究協力者

金沢大学人間社会研究域 学校教育系 准教授 河合 隆平 氏

高等部職員

下 野 令 子

近 藤 明 子

三 宅 和 憲

橋 本 直 紀

清 水 雅 恵

村 瀬 真理子

村 野 智 康

小 足 進 午

鶴 尾 千亜紀

鏡 千佳子

IV 高等部の研究

テーマ：生徒の「なりたい自分」を支援する取り組み

1. はじめに 39
2. 高等部の取り組み 39
 - 【事例1】
 - (1) 対象生徒の実態
 - (2) 支援と経過
 - (3) 考察
 - (4) 今後の課題と方向性
 - 【事例2】
 - (1) 対象生徒の実態
 - (2) 目標に向けての支援方法
 - (3) 支援と経過
 - (4) 考察
3. まとめと今後の課題 47
 - (1) 「なりたい自分」を支援する中で育つもの
 - (2) 事例から考えるニーズの読み取り方や育て方
 - (3) 今後の課題

IV 高等部の研究

1. はじめに

本校高等部に在籍する生徒たちの多くは、学習活動以外にも友だちや教師とかかわったり、趣味や好きなことをして楽しんだり、現在の生活を概ね充実させている。一方、卒業後の生活、就労、余暇などの将来のライフスタイルについての意識はまだ十分とは言えず、そのイメージも漠然として不明確だったりするのが現状である。

生徒の「～したい」「なりたい」という気持ちを原動力として、生徒が将来の社会参加や自己実現ができるよう、私たち教師は支援していきたい。

2. 高等部の取り組み

今年度、高等部は“生徒の「なりたい自分」を支援する取り組み”を研究テーマとし、2事例を取り上げ、実践を行っていくこととする。

【事例1】 A子の「認められたい」を受けとめ支援する取り組み

(1) 対象生徒の実態

A子は高等部2年生であり、中学生の時に広汎性発達障害の診断を受けている。自分のしたいことを優先して行動するなどマイペースであり、社会性に多くの課題がある。学校にはほぼ休まずに来るが、夜更かしにより登校時刻が遅いことが多く、学習の積み重ねが難しい。言語の能力は高く、語彙も豊富で日常会話は可能であるが、相手の立場に立って考えることが難しいために対人関係の困難さを抱えている。それをA子は自覚しており、自身の人間関係について「アンバランス」と表現している。

趣味は、少林寺拳法（現在は休止中）や彫金（週2回教室に通っている）、イラストや小説をかくこと（自分のホームページに掲載している）、インターネットなど多岐にわたっている。また、着物や書道、伝統工芸など日本の文化が好きで強い興味を持っている。学校でも休み時間にイラストを書いて過ごすことが多く、自分のやりたいことをしてA子なりに有意義な生活を送っていると思われる。

・WISC-Ⅲ VIQ:63 PIQ:83 FIQ:68 （平成20年3月実施）

(2) 支援と経過

まず、本校の高等部に入学して1年目の昨年度と今年度の行動を比較し、どのように変化したかを明らかにしていくことにした。A子の行動に関するエピソードは多いが、人間関係のトラブルなどのマイナス面ばかりが目につきやすいので、昨年よりも伸びてきた点などプラス面にも着目したいと考えたからである。また、教師の支援についても同様に比較して、よりよい支援を検証していきたい。そして、A子の全体像から将来に向けての方向性を探っていければと思う。

① 1年時（昨年度）の様子

登校しても教室には入れないことが多く、授業にはほとんど参加できなかった。1日ごとにその日のスケジュールを確認して過ごしていたが、更衣室やメディアルームなどに一人でこもって携帯電話やパソコンに向かっていることが多かった。しかし、行事には大体参加することができていた。

教師のおもな支援の方法は次の通りで、「認める」ことが中心だった。

- ・全面的に受容する
- ・朝、その日のスケジュールを提示して、参加するかどうかが聞く
- ・機嫌のよいときに伝える

本人のやりたいことを活動に取り入れながら、集団に参加できる方法を探っていた。しかし、かかわるのは担任が中心で、他の教師がかかわる機会はあまりなかった。

② 2年時（今年度）のはじめの様子

年度当初は登校時刻が早く、時間割のオリエンテーションに参加することができた。その結果、選択授業を自分で選ぶことができ、「A子の時間割」を作成できた（表1）。そして、「A子の時間割」にある授業には参加するようにA子に伝えた。

はじめは、マンガを読んでいた声をかけられてもなかなか授業に行こうとしないこともあったが、少しずつスムーズに移動できるようになっていった。また、「A子の時間割」では決めていなかったが、A子の教室で学習している国語と社会の学習にも登校すれば参加することができた。それは、自分の席が居場所（ベース）となっていることで、スムーズに参加しやすかったと思われる。

表1 A子の時間割

		月	火	水	木	金
1	9:00~9:10	朝の会				
	9:10~9:40	からだづくり				
2	9:40~10:20	全校集会 (体育館)	体育 (体育館)	部集会 (ホール)	作業 (菜園・陶工)	生活 (高2教室)
3	10:20~11:20					
4	11:30~12:10				自立活動 (河野先生)	
	12:10~	給食				
	13:10~13:25	そうじ (高2教室)				
5	13:30~14:10	作業 (菜園・陶工)	作業 (菜園・陶工)	スポーツ (体育館)	作業 (菜園・陶工)	書道 (高2教室)
6	14:10~14:50			終わりの会		
	15:00~15:10	終わりの会		終わりの会		

態度面では、自分に非があるにもかかわらず周囲に暴言を吐いたりモノにあたったりすることがしばしばみられた。遅刻してみんなを待たせてしまっても、自分が走ってきて疲れていることなどを怒鳴り場の雰囲気悪くするだけで、決して謝罪することはなかった。

しかし、A子の行動全般をみると、2年生になってからのA子の授業への参加率は急激に増えた。それは、新しい年度や学年に対して期待をもって迎えたことにより、年度の変わり目が行動の変化のきっかけとなったと考えられた。

今年度の教師の支援は、次のような「伝える」ことが中心となった。

- ・授業への参加を促す
- ・ルールを伝え、守るよう促す
- ・ダメなことは伝える、注意する
- ・本人や他の生徒の望ましい行動や優れていることを誉める
- ・繰り返し伝える

③ 2年時の2学期の様子

登校すれば、授業にはほとんど教師が声をかけなくても自分から参加できるようになった。その様子から、A子は周囲から認められたい、自分に注目してほしいという思いが強いこともわかってきた。A子の好きな授業は次の通りである。

- ・菜園（作業学習）・・・力仕事だけでなく野菜を育てる楽しみがある
- ・スポーツ（趣味学習）・・・好きな友だちと思いつきり体を動かす
- ・書道（芸術）・・・季節のことばや好きなことばを選んで書く
- ・環境委員会（特別活動）・・・運搬や結束などの力仕事を任せると張り切っている

作業学習に関しては、昨年度はほとんど参加していなかったが、今年度は自分で選択したこともありスムーズに取り組み始めることができた。それは、A子は身体を動かすことや力仕事に自信を持っていて「畑仕事＝力仕事」のイメージがあったことや、A子が比較的好感を持っている生徒が数名いたことも理由と思われる。当初は他の生徒との関係は概ね良好であったが、次第にある生徒に苦手意識を持つようになり、授業の開始時に機嫌よく参加していても、その生徒の言動が目につくと過敏に反応して徐々に感情が高まるようになった。しかし、昨年度より栽培の作業をしている同学年の生徒には一目置いており、ペアで作業を行うと機嫌良く取り組むようにもなった。2学期には、鍬での粗起こしは満遍なく耕すことができるようになり、除草作業も一人で細かな雑草をコツコツと抜く姿が見られるようになった。また、感情が穏やかな時は、他の生徒にも声を掛けて作業を促す場面も見られるようになった。このように、まだまだ感情起伏の激しい面も見受けられるが、小さな種からだんだん変化して生長していく野菜の様子に興味を持って、どの作業種でも真面目に取り組もうとする態度が見られるようになってきた。



作業学習（菜園）に取り組むA子

しかし、年度当初から、教師が説明をしている時でも側にいる生徒に大声で一方向的な話をして、注意を促しても止まることなく話し続けるという傾向は変わっていない。12月のある日、それに対して比較的仲の良い生徒から何度か話すのを止めるよう指摘されて激昂し仲違いしたことがあった。数日は険悪な関係でA子の反撃に相手の生徒の方が耐え難いほどであったが、1週間程で元の関係に戻っていった。

ただ、2学期の後半には登校時刻が午後になることも出てきて、午前の授業への参加が1学期よりも減ってきた。A子は行事が好きなので、行事がある日を楽しみにして間に合うように登校しようとする意識はあるが、それでも気持ちばかりで行動が伴わないこともあった。

態度面にも変化が見られ、友だちの言動が気に入らない時には相変わらず暴言等が見られるが、自分に非があると自覚している時には黙って感情を押し殺すようになってきた。例えば、11月の「学習発表会」の日に遅刻してきた時は、せっかく登校したにもかかわらず黙って踵を返して校門から出て行ってしまった。しかし、帰宅もできなかつたようで電話で母親に説得されると、学校に戻ってきて謝罪の意を表した。そして午後の活動には笑顔で落ち着いて販売などの役割を担うことができ、A子もとても満足している様子だった。

12月の生徒会行事「わたしのメッセージ」では、教師が出場を働きかけたところ二つ返事で答え、自分で書道をテーマに発表することを決めた。そして、発表原稿を書いたり書道で披露する文字を考えて練習したりする中で、相談して準備する時間を決めたにもかかわらず他にやりたいことがあって拒否することもあったが、交渉すると不機嫌ながらも受け入れる面も見られた。当日は、緊張しながらも体育館の舞台上で発表することができた。優秀賞という結果となって笑顔で喜ぶA子を見て、無理だと決め付けないで誘ってみて良かったと感じた。自己肯定感の弱いA子にとっては、自信を持つよい機会になったと思われる。

(3) 考察

A子の全体像を捉えて考えるために、昨年度と今年度の行動の変化を中心に整理した。過去から現在、未来へとA子がどのような道筋を辿って「なりたい自分」に近づいていけるのか図式化したものが資料1である。教師の支援についても同様に整理したところ、昨年度と今年度には一貫して変わらない共通の部分もあることに気が付いた。それは次の通りである。

- ・ 困難さを理解し、受けとめる
- ・ 環境を調整し、自発的な行動を促す
- ・ 本人ができそうなことを誘う

1年と2年のA子の行動を比較してみると、一番大きく変わったのは友だちや教師とのかかわりが広がったことである。それは、A子が2年生になってから急に変わったというより、学校や友だちに慣れるまでに1年間かかったのであり、年度の変わり目が行動の変化のきっかけになったと見る方が適切ではないかと考える。1年時には更衣室やメディアルームなどにこもっていることが多かったため、人とかかわる機会そのものが少なかったが、2年生になった今年は教室が居場所になったため、常に人とかかわれる環境が整った。その結果、2学期には自分から友だちや教師に話しかけるのが日常となり、コミュニケーションの広がりや深まりがみられた。その分、トラブルになることもあるが、関係を切ってしまうのではなく、数日で相手を許してまた元の関係に戻れるようになってきている。それは、友だちや教師との人間関係が築かれていた証拠であり、相手と繋がりたい気持ちがあるからこそ許すことができるようになったのではないかと思われる。

教師の支援については、昨年度から基本的には「受けとめる」という支援の方向性は変わっていないが、その一方で、A子を「認める」ことから「伝える」ことへと重点が変わってきている。はじめは、教師から「伝える」だけであったが、A子がそれを受け入れたり自分の気持ちを発信したりするようになってきた。それは、教師とのやりとりを重ねる中で相互作用が生じ、A子が自分を認められたと感じるようになったのではないかと考える。その結果、伝えたことに対してA子がたとえ拒否してもそれで終わらずに、交渉が成立するようになったのであろう。

(4) 今後の課題と方向性

このようにA子は積極的に友だちや教師とかわるようになるなど多くの面で成長がみられるが、コミュニケーション面も含めて次のような課題が残されている。

- ・ 適切なコミュニケーション（言葉遣い、場にふさわしい会話の内容）
- ・ 生活習慣（夜更かし）の改善
- ・ 社会性の向上（マナーや態度）
- ・ 課題解決力（自分で見通しを持って活動する力）

今のA子は、集団に参加し学習をする経験を積んで、将来の社会生活を送るためのベースを築いている時期であると考えられる。なぜなら、障害特性である対人関係の困難さから学習する経験そのものが少なかったために、将来のことも含めた自分自身へのイメージがまだまだ乏しいからである。従って、将来の職業生活について考えることは難しく、登校時刻が遅いことから産業現場等での実習（以後、現場実習と言う）にも行っていないのが現状である。しかし、自分で人間関係の難しさを自覚しており、トラブルを自発的に回避す

学校

A子

<昨年度>

<現在>

将来

身の回り	・着替えはしない
集団参加	<ul style="list-style-type: none"> ・居場所(ベース)は部室・会議室・更衣室・メディアルームで、教室には入らない ・授業には、馴染みのある教師の授業や興味を持った課題であれば時々参加した(進路、国語、生活、全校集会など) ・行事には、春の遠足と夏の合宿以外には参加 ・食堂で給食を食べたのは、1年で3~4回 ・掃除は、会議室の机の水拭きを1人で担当
コミュニケーション	<ul style="list-style-type: none"> ・機嫌が悪いとよく暴言を吐いていた ・特定の教師となら話せる

<ul style="list-style-type: none"> ・登校後、更衣室で着替える ・体操服を週末に自分で持ち帰ることがある ・学校生活のベースは教室(自分の座席)
<ul style="list-style-type: none"> ・登校したら、ほとんどの授業に参加している(進路、くらし以外) ・授業の場所に自ら移動 ・ほぼ全ての行事に参加(水泳教室に1回間に合わず) ・食堂では週に1~2回は食べている ・教室の掃除を友達とする ・自分で意識して暴言を吐かなくなってきた ・多くの友達や教師に話しかける

<得意なこと・好きなこと>
日本の伝統文化が好き
学習

- ・菜園(作業):力仕事・育てる楽しみ
- ・環境委員会:運搬・結束などの力仕事
- ・スポーツ(趣味学習):好きな友達と思いきり体を動かす
- ・書道(芸術):好きなことばを選んで書く

 余暇(休み時間)

- ・小説を書く
- ・絵やイラストを描く

 余暇(習い事)

<A子の思い>

- ・好きな友達や教師と関わりたい
- ・認められたい、注目してほしい
- ・新しいことに挑戦したい
- ・早く大人になりたい

<課題>

- ・生活習慣(夜更かし)の改善
- ・コミュニケーション(ことばづかい・会話の内容)
- ・社会性(マナー・態度)
- ・課題解決力

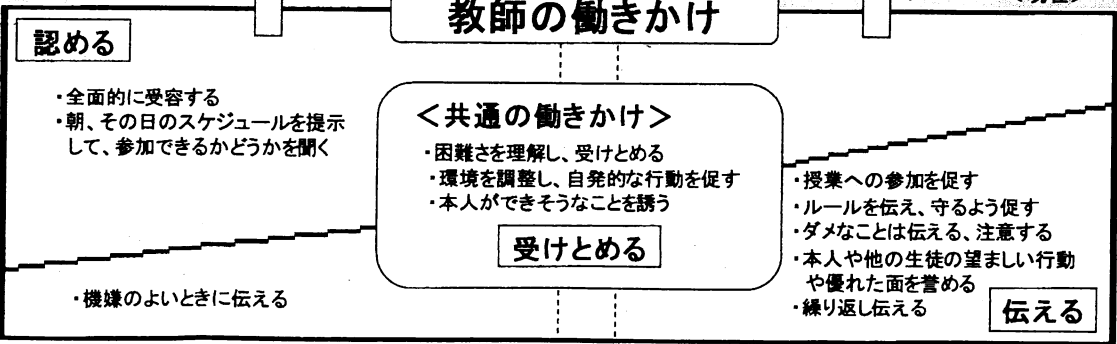
なりたいたい自分



教師の働きかけ

<昨年度>

<現在>



るなどA子なりにゆっくりと学習を積み重ねている面もみられる。

また、A子は目の前にある「やりたいこと」を優先する傾向があるために、目標に向かって段取りをするなど自分で見通しをもって活動することが苦手である。新しいことに挑戦して自分自身で解決していく経験をするにより、できることが増えていくのではないかと思われる。

今後の方向性としては、できることを積み重ねることにより自信を深め、自己有用感を持てるようになってほしいと考える。また、課題の一つである生活習慣の改善に関しては、A子自身がやるべきことや、したいことなどを自覚することが大切であると考え。そのためにも、これまでと同じように、A子に寄り添いながら働きかけるといった支援を続けていきたい。また、A子が主体的に学習活動に取り組むことによって、「なりたい自分」に向かってすすんでいけるように学習活動を充実させていきたい。そして、将来、A子が「なりたい自分」に向かって目標を持って生きていけるようになることを願っている。

【事例2】 B男の「将来、～の仕事をしたい」を支援する取り組み

(1) 対象生徒の実態

B男は高等部1年生で、中学校では通常学級に在籍していた。

真面目で素直な性格であるが、苦手なことを避けたり、物事を心配しすぎたりする面もある。入学当初は休み時間にはメディアルームでインターネットを閲覧していることが多かったが、最近は友だちや教師と話したりコミュニケーションを楽しんだりする姿がよく見られるようになった。課外活動は陸上部に所属し、毎日放課後の練習に取り組み、校外で開催される陸上競技大会にも参加している。登下校は自転車通学を行っており、雨天時には路線バスを利用している。

自動車への興味があり、専門誌を読み、車種(車名)やエンジン性能の特徴にも詳しい。教師との会話においても、「この車の名前全部分かる」「お父さんの車は・・・」と自動車に関する話題が多い。就労については、「自動車関係の仕事がしたい」という希望を持っている。また保護者には「何ができるのか何に向いているのかいろいろな可能性を見ていただきたいです。ぜひ就職させたいです。」という願いがある。

・WISC-III VIQ:56 PIQ:43 FIQ:44 (平成20年5月実施)

・S-M 社会生活能力検査

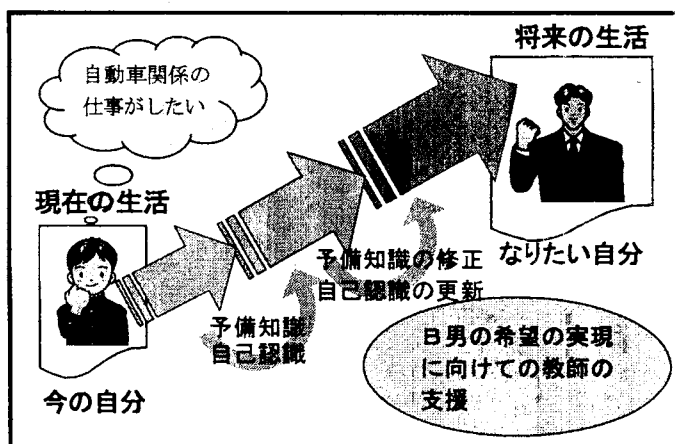
社会生活年齢：11歳4ヶ月

社会生活指数 87

(平成20年4月実施)

(2) 目標に向けての支援方法

B男の希望する就労の実現に向けて、進路学習や作業学習、その他の授業において予備知識を提供する。また実際の現場実習を通してB男の課題を浮き彫りにし、自己認識を深めていく。この一連の過程を繰り返すなかで、将来の就労についてのイメージを具体化していき、目標の実現に向けて支援していく。



目標に向けての支援方法のイメージ

(3) 支援と経過

〈学校生活全般〉

B男は入学当初、学力面において自分は他生徒より優れているというプライドを持っていた。他生徒の言動に注目し「発達が遅れているから」と発言したり、自分をより良く見せようとするあまり事実と異なる発言をしたりする様子が見られた。しかし、学校生活を友だちとともに過ごすにつれ、学力や運動面において実際には他生徒の方が優れている面もある現実を受け入れるようになってきた。

学習時における姿勢や、教師など目上の人と話す際の言葉遣いに課題があるが、教師の言葉かけによって、姿勢や言葉遣いを正すよう意識してきている。したいことがあるとそれに夢中になって授業開始時刻に遅れることもあったが、少しずつ改善されてきている。

〈進路学習〉

進路学習の授業で、生活していくためには光熱費や食費、余暇活動の費用が必要なこと、そのためには収入を得なければならないことを関連させ、なぜ働くのかイメージすることをねらいとした。また作業学習や現場実習、就職のための面接会などでは挨拶や言葉遣いに気をつけること、マナーをしっかり守ること、そして仕事中の私語は作業効率を低下させることを学習した。さらに就職活動のイメージを膨らませるために実際にハローワークやジョブカフェを見学してその役割や利用方法を知った。

B男の課題は、目上の人と話すときや公の場で話す際の言葉遣いである。

〈作業学習〉

菓子工房*では、主に材料の計量と生地作りの役割を担当している。当初は正確に計量すること、材料や道具、製品を衛生面に注意しながら丁寧に扱うことを目的とした。B男は早期にその目標を達成したので、全体の作業の流れを見ながら適宜材料を計量し、作業が滞らないようにすることを新たな目標とすることができた。しかし、作業に慣れた頃から、時折不注意による失敗をするようになってきた。そこで同時に二つのことをしないで一つずつすることや、失敗したらすぐに報告することを伝えた。B男は担当教師の説明やアドバイスを素直に受け入れ、同じミスを繰り返さないようになってきている。

また、はじめのうち長時間の立ち仕事に疲労を訴えていたが、今では持続して取り組むことにも慣れてきている。

*、菓子工房・・・本校高等部4作業種の一つで、クッキー製造の作業班の名称

〈現場実習〉

①実習先の決定まで

B男は職場見学や前期現場実習の報告会を通して、職種や実習先についての情報を知り、現場実習についてのイメージを徐々に持つことができていた。

10月に初めての現場実習を実施するにあたり、進路担当の教師が自動車関係でどういう仕事をしてみたいかを尋ねたところ、「A社(自動車用品販売)」と答えた。「タイヤや車のアクセサリを販売してみたい」のが理由であった。そこで自動車用品販売店だけでなく、自動車メーカー、洗車会社と自動車関係での実習先に依頼したが、実習の受け入れ先はなかった。

実習先の決定が難航し、クラスではB男だけが実習先未定となった。「僕だけ決まっていない。不安や・・・。」と心配していた。進路担当教師とB男はハローワークへ行き実習先を探したが、自動車関係では実習先が見つからず、肩を落とすB男の様子が見られた。

「自分にあった仕事がいい」というB男だが、どのような仕事に向いているか分からな

い様子であった。そこで、ハーネス（自動車の部品）の組み立てを行っているK作業所や、基盤組み立てなどの細かい作業を経験できるF社を紹介した際、いろいろと仕事を経験することが将来の就労につながることをB男は理解し、自動車関係以外でも実習することに同意した。進路担当教師が実習先の候補を5カ所リストアップし、B男に希望を聞いた。保護者と相談の上、B男が選択した実習先はF社であった。

②実習の実際

実習先決定後、B男は進路担当教師とともに、F社の従業員が基盤の点検をしている様子を見学した。B男は実習できる喜びを見せ、事前に朝の勤務時間にあわせて一人で路線バスを乗り継いで行く練習も自主的に行った。現場実習に対する意欲の高さが感じられた。

5日間の実習では基盤の組み立てやオルゴール作りを行った。初めて使う電動ドライバーの操作にもすぐに慣れ、配線や大小のビス止めを行った。しかし、1日目に作業した基盤全部に配線ミスがあることがわかり、2日目に50セット全てやり直すという経験をした。



現場実習で基板の組み立てを行うB男

③実習の振り返り

現場実習を終えてのB男の感想は「楽しかった」であった。やさしい従業員と一緒に仕事ができたと、着席しての作業で体力的には問題が無かったことがその理由である。

実習報告会では、大変だったこととして「仕事の怖さを知った」と発表した。配線ミスが会社全体に影響を与えるという現実を知ったのではないかと推測する。

実習先からの評価は作業面では全般的に高かったが、正確さや効率（量・速さ）については低い評価であった。所見は以下の通りである。

〈作業面の所見〉

多少理解力に欠けるときがあり、集中力が途切れると、思わぬ失敗をするときがある。

〈生活面の所見〉

性格としたら、素直でありよいと思う。

（4）考察

B男はこれまでの進路学習や作業学習、職場見学、現場実習報告会などでの学びのなかで、卒業後の進路や働くことをイメージする多くの予備知識を得ることができた。また実習先の決定まで長く時間を費やし、進路担当教師とハローワークで仕事を検索しても自分の希望する職種が見つからなかったことで、就労に関しての現実的な一面も実感することができた。そして実際の現場実習では仕事の内容や勤務時間だけでなく、通勤手段、従業員とのかかわり、昼食有無の条件についても考える機会になったのではないかと考える。進路担当教員や担任にとっても、この現場実習を通して、B男の能力や適性をさらに知ることとなった。

B男は今後の現場実習では、今回と異なる職種をいろいろ経験したいとし、他の生徒が実習したスーパーマーケットやケーキ屋を候補に挙げていた。そして「力がついたら、3年時に車関係で現場実習に取り組みたい」という意志は持っていた。ただ自動車整備士になるには、専門学校で整備士の資格を得ることが必要であることも認識しているようであ

った。

B男は「自動車関係の仕事がしたい」という希望を持っているが、趣味や憧れの延長線上にあるように思われる。職種や仕事に関するB男の予備知識を広げ、経験を積んで仕事に対する認識を育て、将来のライフスタイルについてのイメージを広げていくことで、自分の適正を自己認識し、自分の適性に合った職業・職種を見つけることにつながると思われる。B男の希望を反映しながら実習先を選択する機会を継続して設定していき、B男の「～の仕事がしたい」がより具体的に現実的になっていくように支援していきたいと考えている。

そのためにも、B男にとって課題となっている挨拶、言葉遣い、姿勢については、作業学習や現場実習に限定せず、学校生活全体を通して習慣化できるよう支援していきたい。特に異性の友だちや教師とのコミュニケーションにおいて、マナーや距離感についての課題も顕在化してきているので、適度な距離感や配慮することを伝えていきたい。

希望する就労の実現に向けて、B男の思い描く「なりたい自分」を原動力に、今後も継続して支援していきたいと考える。

3. まとめと今後の課題

今年度の高等部の研究テーマ“生徒の「なりたい自分」を支援する取り組み”は、昨年度までのテーマ「一人一人の豊かな生活をめざす実践 ～子どもから出発して～」を受けたものである。生徒の「～したい」や「なりたい」を出発点としてその実現について事例研究を行ってきた。

(1) 「なりたい自分」を支援する中で育つもの

近年、中学部や高等部から入学してくる生徒の中に、集団や授業に入ることのできない子どもが出てきている。人間関係に^{つまづ}いたり認められる機会が少なかったりして、自己肯定感が弱く、失敗することを極端に恐れる生徒でもある。事例①はそのようなA子の「今の姿」を全面受容することから始めた実践である。授業に入れないA子には初めのうち「～したい」への支援そのものが授業となった。自分を受け入れてくれる教師との信頼関係を基盤にして友だちと関係を結びなおし、再び教室に自分の居場所を作ることができたと考えられる。時折後退しながらもA子自身が譲ることや教師と交渉できる場面も見られるようになってきた。人間関係に困難さを感じている生徒には、本人の「～したい」を受け止めて支援を重ねることで、教師への信頼感を育てることができるようになる。そしてその人を中心にして、再び人間関係を形成していこうという気持ちを持つことができるようになるのではないかと考えている。

事例②は自動車関係の仕事がしたいと考えているB男についての実践である。B男の希望を聞き、主体性を尊重しながら共に実習先を考えたり探したりする中でB男も前向きに取り組むことへのイメージや認識を広げることができた。そして、いろいろな職種を経験してみようという気持ちが出てきた。結果的に希望の職種での実習はできなかったが、本人なりに納得して意欲的に実習を行うことができた。また、本人の「～したい」を原動力にして、実習の前後の授業や学校での活動に目的意識を持って取り組むことができた。本人が主体的に意欲を持って活動するためにも、その中心に「～したい」を置くことは大切であると考えている。

(2) 事例から考えるニーズの読み取り方や育て方

今年度は、自分の「～したい」「なりたい」を言葉で発信できるA子とB男を事例として取り上げた。しかし、A子のように自己肯定感が弱く、周囲から認められたいという思いがある生徒の場合には、発信しているニーズの背景にいろいろと複雑な思いがあることを知ることができた。そのニーズも状況や本人の気持ちによって変わっていくため、読み取ることより支援していくことの難しさを実感した。ニーズについては、発信している言葉を基本としながらも、本人の好き嫌いや得意不得意を知り学校や家庭や地域での過ごし方を把握するなどして、総合的に読み取っていくことが必要であると考えている。

私たちは、生徒の「～したい」「なりたい」という主体的な気持ちを一度受けとめたい。それによって、生徒と教師の間に信頼感が生まれ、生徒が自分の希望を出すことのできる環境が整えられる。同時に、学校や実習でいろいろな経験を重ねたり、友達同士で学びあったりする中で、将来の自分についてのイメージや知識などが広がっていくと思われる。その結果、自己認識が深まり、自分の適性を踏まえたニーズに変わっていくことが、ニーズを育てることにつながる一つの方法ではないかと考えている。

(3) 今後の課題

将来の自分についてのイメージや知識などが広がることで生徒自身の「なりたい自分」が変わっていくことがある。その時点での「～したい」「なりたい」を受けとめて、生徒の主体的な将来の社会参加や自己実現のためには、どのような教育課程や授業内容が有効なのか検討を重ねていきたい。私たちはこれからも、生徒が発信する「なりたい自分」を受けとめて、寄り添い、ともに考えながら、その支援方法を模索していきたい。